

Institute for Language Education
Aichi University, Nagoya

Goken News

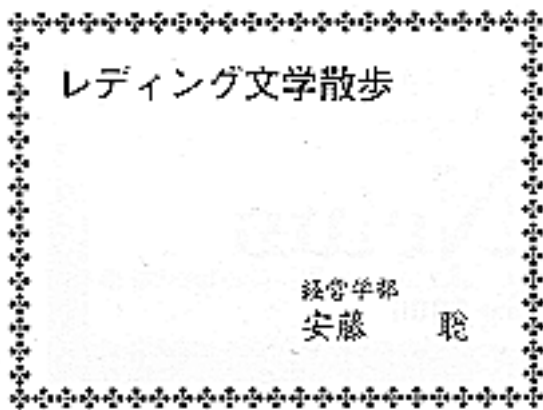
No. 2 January 2000



人々の悲惨な死の無数が、
私たちに歴史の原味を
無言のうちに問いかけてくる……
(写真はアウシュビッツ絶滅収容所跡)

CONTENTS

・ レディング文学散歩 (安藤 聡)	2	・ 英国の食べ物 (三好 正弘)	9
・ 欧州統一通貨：ユーロ (藤本 光夫)	3	・ 韓国返しの効用 (太田 明)	11
・ フィンランドの文化と高橋 (平尾 節子)	5	・ オシフィエンチム紀行 (田川 光順)	13
・ 歴史の都ウィーン (北嶋 繁雄)	6	・ アウシュビッツ、そしてプラハ (竹中 克英)	15



理解するために、この街にゆかりのある若干の文学者たちを訪ねるためのレディングの歩き方を紹介しよう。

ジェイン・オースティンは生涯をイングランド南西部の静かな田園地帯で過ごし、『高慢と偏見』、『分別と多感』（映画『ある晴れた日に』）、『エマ』等六編の長編小説を発表している。それらの作品は皆、田舎の上層中流階級の邸宅を舞台とし、これといった劇的な事件が起こることもなく、小さな世界における人間の行動を描くことだけに終始して静かに展開する。この偉大な女性作家は1785年から二年間、レディングの女子修道院学校に姉と共に在学している。レディング駅南東のフォーベリー・ロード（国道B479）にあるベネディクト修道院の廃墟は、当時オースティンが学んだ学校の一部だった。

同じくイングランド南西部に生まれ育ち、その一帯を主な舞台とした『テス』、『カスターブリッジの市長』等で知られる小説家トマス・ハーディは、『日陰者ジュード』（映画『日陰の二人』）の中で「オルドブリッカム」と名前を変えてこのレディングの街を描いている。運命に翻弄される人間の悲劇を描き続けたハーディの小説の例に漏れず、主人公ジュードもまた悲劇的な生涯を送る。ジュードが最初の妻アラベラと再会した際に、二人で行ったのがキング・ストリートのマーケット・プレイス近くにあるジョージ・ホテルだとされている。

そして、レディングの文学散歩として忘れてはならないのが、昨年そのスキャンダルに満ちた生涯が映画化されて話題になったオスカー・ワイルドである。代表作として戯曲『サロメ』、『ウィンダミア夫人の扇』、小説『ドリアン・グレイの肖像』さらには童話集『幸福な王子』等、幅広い作風で19世紀末の文壇を代表するワイルドは、当時犯罪とされていた同性愛の罪で、レディングの刑務所で二年間の懲役に服している。ワイルドが投獄されていた当時の獄舎は現存しないが（オースティンの学校と同じフォーベリー・ロードにあった）、ここで執筆された「獄中記」は有名である。

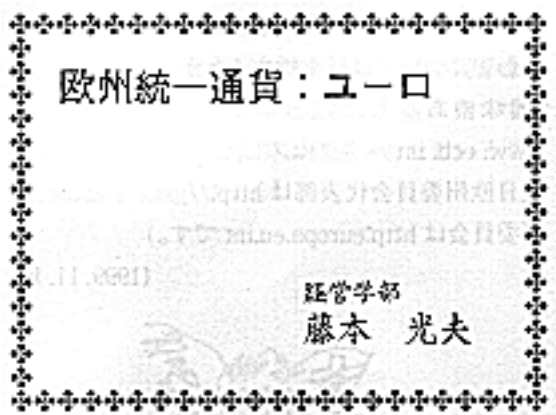
「11時頃、レディングが見える所まで来た。河はこの辺になると薄汚くて陰鬱である。レディングの近辺でグズグズしている気にはなれない。町それ自体は遥かイーズルレッド王の時代にまで遡る、古来有名な町である... 後になるとレディングは、ロンドンに何か不快なことが起こったときの絶好の疎開地として考えられるようになった。ウエストミンスターに疫病が発生すると議会はレディングへ移るのが通例であった。1625年には高等法院もこの真似をし、裁判はすべてレディングで行われた。だから弁護士や代議士を追払うためには、時々ロンドンに疫病をはやらせるというのも一考に価する案であろう。」

これはジェロウム・K ジェロウムの「ボートの三人男」からの一節である。1889年に出版され、今なお英国ユーモア小説の名作に数えられている。三人の若い紳士が愛犬を連れ、ロンドン郊外のキングズトンからオクスフォードまで、テムズ河を船で遡る珍道中を綴ったものであり、当初はテムズ観光案内書として書かれたが、執筆中に著者と二人の友人をモデルにした案内役達が個性を強め、結果的に小説になったという。

滑稽文学であると同時にこの作品はいわゆる田園文学の系譜にも属し、テムズの畔のいかにもイングランド的なカントリーサイドの風景美を余すところなく伝えている面がある。その中であってレディングは、この行程で最も大きな街ということもあり、田園を愛し都市を嫌悪する英国田園文学の伝説の元に不当にこきおろされそいる気がしないでもない。レディングの文化的な側面をより

また出所後ワイルドはパリに渡るが、その地で1898年に詩「レディング監獄のバラッド」を書いている。この中でこの詩人は、「監獄の中で我々囚人が知っていることは／壁が頑丈だということだけ／毎日は一年のごとく長く／その一年の中の一日も長い」と歌っている。

レディングからテムズをもう少し遡ったところにある村パングボーンはケネス・グレイアムが晩年を過ごした土地であり、この童話作家の「チャーチ・コティジ」が通りを少しはずれたところに現存する。『ポートの三人男』でもこの村のホテル「スウォン・イン」に言及している。またグレイアムが育ったのはレディングから反対にテムズをロンドン方向に下った村クッカム・ディーンであり、このあたりの川沿いの田園風景が代表作『柳に吹く風』（邦題は「楽しい川べ」または「川辺にそよ風」、またこれをミュージカル化した作品は原題のまま『ウィンド・イン・ザ・ウィロウズ』）の舞台になっている。ロンドンでの銀行員としての仕事に疲れたグレイアムは、都市生活、機械文明、産業主義からの逃避の場として、この川べりの田園にある種の桃源郷を描こうとしたのだった。



「ユーロ」という言葉は、「欧州」もしくは「欧州の」といった意味にも使われる。たとえば、インターネットでフランスの新聞、「Le Monde」(<http://www.lemonde.fr>)にアクセスし「ユーロ」を検索してみると、ごく最近の記事だけで3000項目が記録されており、その内容は欧州の社会、経済、金融、ときにはスポーツにいたる多様な事象を含んでいる。

しかし「ユーロ」はもう一つ、今年の1月1日に誕生した新しい単一通貨の呼称でもある。ただし、この単一通貨の創出に参加している国は、欧州連合（EU）15か国のうちイギリス、スウェーデン、デンマーク、ギリシャを除く11か国である。そのなかで、イギリスは2002年の参加が確定している。スウェーデンとデンマークは今年に入って通貨統合参加への国民の支持が高まっていて、2001年に参加する可能性もある。ギリシャは参加に必要な政府の財政赤字、累積債務などの達成基準を満たすべく努力を傾注することになるう。

ところで、ユーロは、当面、非現金取引（資金調達、為替取引、取引の支払い・受取・決済等）に使用され、現金での使用、つまり紙幣と硬貨（コイン）の流通は2002年からとなる。ここまでの期間はユーロの本格的な導入までの「移行期」と呼ばれ、加盟国の通貨とユーロとが併用される。このあと半年間、各国において通貨の回収が続けられ、最後にはこれら通貨は廃止される。とはいえ、移行期に入ってユーロの使用範囲は急速に拡大してきた。例えば、2月始め、必要があってフランスへ送金するため郵便局で手続きをしようとしたところ、すでにフランス・フランの送金はできなくなっていて驚き戸惑った。（ただし外為銀行からのフラン、マルクなどの送金は可能）。

通貨統合後の参加国の金融政策や外為政策は、新設され、本店をフランクフルトに置く欧州中央銀行（ECB）によって実施されている。各国の中央銀行はこのECBの決定に基づいて、その政策を国内に反映させる。なお、ECBの総裁をめぐるドイツとフランスとの間で熾烈な駆け引きがあり、その結果ドイツ人のドイセンベルグ氏が決定し、就任している。

ECBの意志決定は総裁・副総裁と4名の理事から成る役員会メンバーおよび加盟国中央銀行の総裁で組織される「政策委員会」が行う。従ってECBは金利・預金準備率を挺子にした金融政策と外為政策によるユーロ相場の調整を通じて、加盟国の「物価安定」に責任を負うのである。とはい

え、財政政策、租税政策にかかわる権限は、加盟国政府が所管しているので、ECBの政策効果はいま一つ完璧とはいえない（だが12月の首脳会議では課税の統一化を定める「税制大綱」の作成が予定されている）。

本年1月よりユーロへ移行した取引の分野は、金融・外国為替政策における取引、マネー・マーケット（インターバンク取引）、証券市場での新規公債・既存公債・民間債と株式などの取引であり、すでに域外諸国の政府・金融機関による外貨準備としてのユーロの保有、ユーロ建て債の発行・購入などが急速に増加してきた。後者にかんしては、エキュ（欧州のバスケット通貨）債が1対1の比率でユーロ債に転換されることに決まっていたことから、実質的には1999年以前からユーロ債の発行が開始され、急速に増加していたのである。

とりわけ、アジア諸国、なかでも中国は意識的にユーロによる外貨準備を増やす政策を採っている。このことは、これまで主要国の外貨準備の60%近くを占めていたドルの地位の是正、つまりドルからユーロへの資金移動が行われていることを意味する（この規模は1兆ドルとの試算もある）。つまり、パックスアメリカナの象徴としてのドルの地位の低下、反対にドルに対抗する基軸通貨の登場といえる。ユーロがアジア諸国によりポジティブに受け止められたのは、ドル支配への反発と自国通貨のドルとのペッグ（固定的リンク）制により被ったダメージへの反省、したがってドルとのリンクにリスクの回避志向が背景にある。こうした中で、強大な経済圏をバックに持つドル、ユーロの通貨ブロックに対し、アジアでの基軸通貨の必要性がしばしば取り沙汰され日本円に期待が集まる。たとえば、本年の4月、外国為替審議会では「円の国際化」視点から「通貨バスケット制」を提言している。

この通貨統合は、これまでの欧州における経済統合すなわち欧州経済同質化の最高の段階を意味しており、これまでの国家間経済障壁の撤廃、競争条件の同一化などに加え、為替変動に伴うリスクの解消やコストの削減、投機行為（経済不安定

要因）の消滅、さらには国際通貨としてのユーロの安定性といったメリットが生み出され、そのゆえに域内の産業構造、企業間競争の諸条件を大きく変化させ、1980年代後半から90年代初頭にかけて盛り上りを見せてきた日米多国籍企業も巻き込んだ産業・金融再編成とM&A（企業の合併と買収）、戦略的提携の波をさらに増幅し、加速させ、巨大なもの（メガディール）にしてきている。2000年を目標にした「欧州統一証券取引所」の発足もこうした流れを加速するはずである。

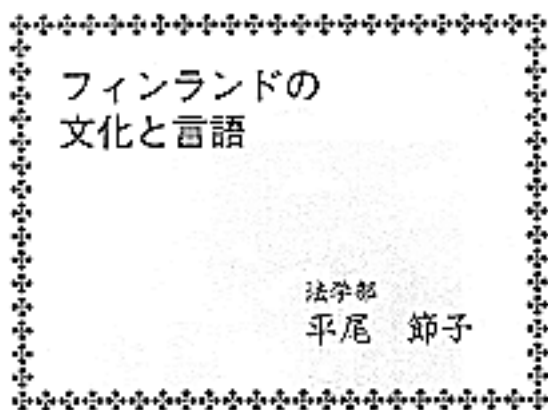
ところで、これまで予想外の「ユーロ安」が進行してきた。4月時点での要因は、ECBの政策金利0.5%の利下げ決定、ユーロ情勢の緊迫化、欧州の景気低迷、当局（総裁）の容認姿勢等が指摘されていたが、秋になっても基調は変わっていない。欧州諸国での高い失業率に加え、ドイツの与党における指導部の対立、その州議会等選挙での敗北に示されるように欧州中核国での政治的、社会的混迷が影響しているものとみられる。しかし、ECBは11月10日から0.5%の利上げを決定した。輸出や生産の増加 景気の加速を抑え、持続的発展を目指す、という。

いずれにしても、新通貨、ユーロがもたらす欧州経済へのインパクト、さらにはそのグローバルな影響については目を離すことができない。

（興味のある方はECBのホームページ<http://www.ecb.int>へアクセスしてみてください。なお駐日欧州委員会代表部は<http://jpn.cec.eu.int>, 欧州委員会は<http://europa.eu.int> です。）

（1999.11.10）





フィンランドは別名“Suomi”スオミ（湖の国）と呼ばれる。実に19万湖あるという。私がこの湖の国を訪れたのは、1996年8月フィンランドで開催されたAILA World Conference（国際応用言語学会・世界大会）において研究発表を行うためであった。会場のイヴァスキュラ大学は首都ヘルシンキから列車で約2時間の北方にある。真夏の澄みきった青空の下、キャンパス周辺の緑の樹木に囲まれて点在する限りなく蒼い湖の美しさに目をみはり、感嘆の声を挙げたのであった。まさに森と湖の国の大学であった。語学教育研究の中心的大学であり、日本語教育も盛んである。

「フィンランドと日本は隣国よ」

Dr. Liisa Salo Leeが微笑んで握手して下さった時の歓迎の言葉である。フィンランドは大西洋上のアイスランド共和国に次ぐ世界最北端の国であるのに???「なぜならフィンランドはロシアの隣に位置し、そのロシアの隣に日本があるから」と言われた。

日本人にとって北欧は、はるか遠い国々とのイメージがある。「日本からヨーロッパは遠い、北欧はもっと遠い」と感じている日本人が多いのではなかろうか。遠い、近いは、地理上の距離よりも心理的な距離によるところが多い。フィンランド人の親日感情に接して、感動したのであった。

フィンランド語は、言語学的には、日本語と同じウラル・アルタイ語群で、そのうちのフィン・ウゴール語族に属している。語尾が母音で終る点など、日本語との親似が見られる。また、フィン

ランド人と日本人との国民性の共通点が三つ挙げられると言う。第一にpolite（礼儀正しく）、第二にreserved（内気で）、第三にpunctual（時間に厳しく）and trusty（信頼できる）と。

Dr. Liisaは、異文化間コミュニケーション学の立場から「アメリカ人のコミュニケーション・パターンがaggressive, emphatic, direct, persuasive, talkativeであるのに対して、フィンランドの学生の場合は、defensive, monotonous, indirect, silentで、hesitateする」と述べられた。日本の学生と似ている!!!

フィンランドの歴史的背景からも、その国民性が窺える。1155年からの約600年間は、スエーデン王国の統治下にあり、その後、1809年以降、1917年に独立を獲得するまでの100年間、ロシアからの弾圧と苦難の歴史の故に、フィンランド人は愛国心と自立意識の強い国民である。

フィンランドの誇る文化遺産である、叙事的民族詩カレワラや、シベリウスの交響楽などに、フィンランド人の結束心の昇華をみることができ。日露戦争におけるロシアの敗北は、国民の勇気を大いに鼓舞したという。日本海海戦において、ロシアのバルチック艦隊を壊滅させたAdmiral Togo（東郷元帥）はフィンランド人にとって偉大なる英雄だと聞いて驚いた次第である。

1995年フィンランドは平和への悲願から欧州連合・EUに加盟した。政治・経済的にヨーロッパ間の平和・安全、発展・拡大への協力体制に貢献する中で、特にその教育改革は、ヨーロッパ市民性・語学力の養成、文化遺産・環境保持と開発・経済成長を促進するためフィンランド戦略にとって重要であるとしている。

フィンランドの語学教育政策

フィンランドの公用語は2ヶ国語で、フィンランド語とスウェーデン語である。19世紀フィンランドはロシア帝国の一部であったため、義務教育において、ロシア語が必修科目であった。1917年独立以来、ロシア語は選択となり、1970年に導入された総合制学技の改革に伴い、フィンランド語と

スエーデン語が必修となった。また、約3分の1の児童が第3の外国語を選択科目として履修する。1989年の語学教育審議会の答申によると、貿易・産業・工業振興の上で、英語とスエーデン語が最重要であり、ドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語が続く。

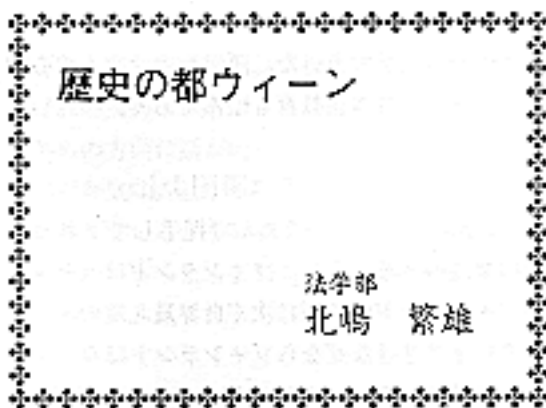
スペイン	561	ポーランド	559
フランス	556	ギリシャ	547
日本	496		



ウスペンスキー大聖堂（1868建立）
ヘルシンキ・フィンランド

フィンランドの外国語教育の現状

総合制学校は9年間の義務教育機関であり、1学年から6学年までがLower Stage、7学年から9学年までUpper Stageである。第1外国語はLower Stageから週2時間履修する。母語以外の英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、スエーデン語／フィンランド語の中から1つが選択必修である。ちなみにフィンランド語を母語とする者は94%、スエーデン語は6%である。Upper Stageでは、第1第2外国語が必修であり、第3の外国語を選択履修する。1992年の答申により、総合制学校における必修外国語2ヶ国語のうち、1ヶ国語は、英語とされた。EU統合に伴い、イタリア語、ギリシャ語も選択科目に加えられた。また、歴史、地理、文学、数学、理科等の科目において外国語を用いて教えることが提唱されている。特に、外国語学習におけるオーラル・コミュニケーション能力の養成が、特に重視されている。教育省は1994年から新しいカリキュラムを導入。英語は、第1外国語として小学校において90%以上の児童が学習している。



フィンランドにおける英語教育の成果

大学生の英語能力の評価資料として、TOEFLスコアの国際比較リストが挙げられる。

TOEFL平均スコアのEU・国際比較
1008 - 99年データ

オランダ	616	デンマーク	606
ベルギー	602	オーストリア	596
フィンランド	594	ドイツ	594
ルクセンブルグ	601	スエーデン	589
ノルウェイ	589	ポルトガル	575
チェコ	570	イタリア	551

(1) その歴史

ウィーンは言うまでもなくオーストリアの首都、ドナウ川のほとりの歴史的都市であり、周知の芸術の都、そして今は観光の都市でもある。

歴史的に説明すれば、オーストリア（Austria, Österreich）という国名はフランク王国のカルル大帝が東方のアヴァール人を征服し、Ostmark（東方辺境区）を設置したのが始まりで、その地域が996年ドイツ国王オットーIII世の証書の中で、当時の俗語でOstarrichi（「東方の国」）と表記される。1147年国王コンラートIII世がウィー

ン郊外にあるクロスターノイブルク修道院に与えた証書に“*Austrie Marchio*”（オーストリア辺境伯）という表記が見られる。国名の起源は10世紀に遡るといえる。

12世紀、オーストリア辺境伯はバーベンベルガー家（*Babenberger*）で、1156年辺境伯領から大公領に昇格されて、オーストリア大公になった。1246年バーベンベルガー家が断絶し、1251年ベーメン国王オタカールII世がオーストリアを領有する。1278年オタカールII世がハプスブルグ家のルードルフI世に敗北し、以後640年にわたってハプスブルグ王家の支配が続くことになる。

首都ウィーンの起源はローマ帝国の時代に遡る。紀元100年頃ローマ軍の駐屯地*Vindobona*が建設され、この地名が*Wien*につながる。ウィーンから東へ列車で約1時間ほどのところにペトロネル・カルヌントウムという村があって、ここにローマ軍の駐屯地*Camuntum*の遺跡があり、現在も発掘が続いている。*Vindobona* , *Carnuntum*はドナウ川を前にしたローマ帝国北辺の最前線基地であった。180年五賢帝の最後、哲人皇帝といわれるマルクス・アウレリウス帝がゲルマンのマルコマンニ族との戦いで、陣頭指揮をとりヴィンドボナで陣没したといわれる。

ウィーンは12世紀にオーストリア大公の居住地となり、ハプスブルグ王朝の下では神聖ローマ帝国の首都として繁栄の道を辿ったのである。

（2）ウィーンという街

現在のウィーンの街並みは、1857年12月の皇帝フランツ・ヨーゼフI世の都市改造令によって今日の姿になったといわれる。フランツ・ヨーゼフI世は1848年12月僅か18歳で即位し、1916年11月27日治世68年、86歳で生涯を終える。在位の長さでは、ヴィクトリア女王三昭和天皇も似ている。この皇帝ほど公私にわたって不幸を経験した皇帝もいないといえる。彼自身、即位の5年後、当時まだウィーンを囲んでいた城壁の上で刺客に襲われ、危うく難を逃れた暗殺未遂事件（1853）にあう。そしてこの事件が都市改造令を出すこと

につながったともいわれる。1868年には、弟のマクシミリアンが雇われ皇帝として出かけたメキシコで革命の犠牲となって銃殺された。さらに、嫡子ルドルフは1889年1月にギリシア系の男爵令嬢マリー・ヴェッツラとウィーンの南西マイアーリングの狩猟用別館で自殺する。この自殺の原因は皇太子と皇帝の不和、恋愛問題、或いは政治的背景などいろいろ取り沙汰されたが未だによく分かっていないという。その上、最愛の美しい皇后エリザベートは1898年ジュネーヴでイタリアのナーキストの青年に暗殺されている。この美貌の皇后は今もウィーンでシシィの愛称で人気があり、その彫像や肖像画はマリア・テレジアのそれとならんでよく見かけるし、ミュージカルも上演されている。最後に、帝位継承者と定められていた甥のフェルディナント皇太子を1914年6月28日サラエボで失う。この事件が第1次世界大戦の引きがねになったことは周知のところである。このフランツ・ヨーゼフI世がオーストリアに残したものの、それがウィーンの都市改造、美しい帝都の完成であった。

1857年暮れの都市改造令でウィーンの近代都市への拡張が始まり、城壁を取り壊したあとを環状道路（リングシュトラッセ）とし、美しい並木の続く広々とした道路と両側に六階建て程の高さでほぼ統一された建物の立ち並ぶ街並みになる。

リングシュトラッセに沿って、ルネサンス様式の宮廷オペラ劇場（現在の国立オペラ座）、新宮殿*Neue Hofburg*、美術史博物館*Kunst historisches Museum*、それと向かい合わせ一對となっている自然史博物館が建ち、次いで国会議



事堂のギリシア様式の壮麗な建物が続いて、隣り合わせて市庁舎Rathausのゴシックの尖塔がシュテファン・ドームの塔と競うかのように聳え、市庁舎前広場をはさんで、向かい側には新古典主義様式のブルクテアターが荘重な趣で建っている。そしてリングシュトラッセをはさんで斜め向かい側にはルネサンス様式のウィーン大学の本館Hauptgebäudeがあり、市民にUni.と呼ばれて親しまれている。オペラ座から大学まで、歩いて30分もかからないような道筋にこのような公共の壮麗な建物が立ち並んでいる都市景観は他には見られないであろう。ウィーン・フィルハーモニーの本拠、楽友協会ホールもオペラ座から5分ほどのところにあり、そこから10分も歩けばコンツェルト・ハウスがある。市民はリングシュトラッセに沿って文化的生活を享受できるのであり、日本では経験できないウィーンの良さであろう。またこの環状道路に沿ってStadtpark、Burggarten、Volksgarten、といった緑濃い美しい公園が市民の憩いの場所となっている。

これらの建物は19世紀の後半、すぐれた建築家達のコンペ方式で設計を募り建築した。オペラ劇場はシカールツブルクとヴァン・デア・ニユルという二人の建築家の共同で1861年12月から工事が始まったが、内装をめぐって対立し中傷合戦などあり工事が遅れた。そして皇帝がふともらしたという批判の言葉がもれて、それを聞いたヴァン・デア・ニユルは大変ショックを受け、建物の完成を待たず68年4月に自殺してしまう。これは皇帝にもショックだったようで、「以後50年間、皇帝は人前では自分の意見をもらさなくなり、いつも『まことに見事だった。余は実に嬉しく思う。(Es war sehr sch^{sch} , es hat mich sehf gefreut.)』というだけ」になって、これが人々の流行語になったという。

ウィーンの教会、官殿、一般の建物はバロック様式の華麗さを留めている。入口や屋上に見られる彫像や彫刻は装飾過剰にも恩われる。ヘルマン・ブロッホは「ウィーンの陽気な黙示録」という文章の中で、ウィーンは「.....芸術の都どころか

第一級の装飾の都市であった。装飾性にふさわしくウィーンは朗らかであり、しばしば白痴的に朗らかであった」という。そしてウィーンにはこの装飾を許される資格があったのであり、それは「装飾がオーストリアの音楽・演劇の伝統の中に最も純粹で美しい効果を残しているからだ」という。ウィーンにはハプスブルク王朝文化の余韻が今日に伝わっているのであり、それが外から訪れる私たちを魅了し、楽しませてくれる。

この街の印象について、人々が語っているが、一様に女性に譬えている。「ウィーンを支配するのはゆるやかなかたまりであり、球形である。これは女体だ。きわめて女性的な肉体だ」(池内紀)、「若い栄華のままに正装し、厚化粧した老婆」(中野孝次)、「憂愁ただよう中年の女性のような」(塚本哲也)といった具合である。池内氏の印象には、「世紀末ウィーン」のどこか頹廢的な雰囲気が重なるようである。これらは、男性のみたウィーンの印象であり、女性からみたらどうなのか、残念ながら女性の印象記を読んでいないので何ともいえないが、男であれ女であれ、受ける印象は同じではないかと思う。日本から行って、誰しもヨーロッパは空気が乾いていると思う。女の人は肌があるとかいう。そうした乾いた透明な大気の中で、しかも初夏の明るい陽ざしを浴びながら、カスターニエン(橡の木)やフリーダ(ライラック)の花などを抜けるような青空の下で見、その背景にくっきりとした尖塔や家並みを眺めるとつくづく美しい街だと思う。そして明確な輪郭の中に柔らかさを感じさせる点で、ウィーンは女性的円型都市なのかもしれない。

(3) 今日のオーストリア

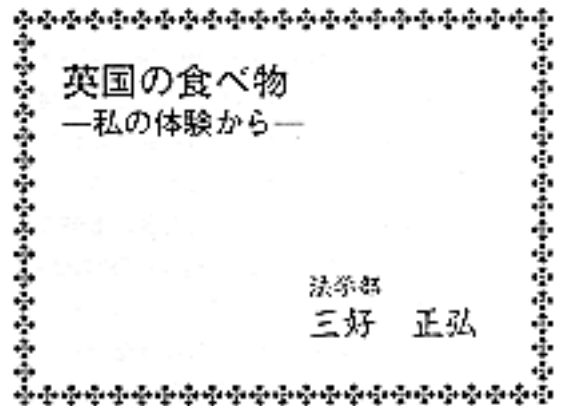
1938年オーストリアはナチス・ドイツ(ヒトラーはオーストリア生まれ)に併合され、45年第二次世界大戦敗北後、中立国家として再出発する。現在EU(ヨーロッパ連合)に加盟しているが、NATOには加わっていない。最近コソボ紛争で、ユーゴスラヴィアをNATO空軍が爆撃したが、オーストリアはNATO空軍機のオーストリア領空

の通過を許さなかった。

19世紀半ばオーストリア・ハンガリー二重帝国を形成し、過去ベーメン（チェコ、スロヴァキア）、ハンガリーを支配下におく多民族国家であり、東方のスラヴ民族と西方のゲルマン民族の狭間にある中欧の国家として長い歴史を辿っている。オーストリアは国家としての、またオーストリア人としてのアイデンティティー（存在証明）を常に問いかけているようであり、中立国家として存在することにそれを求めているのではない。それが歴史からオーストリアが得た叡知でもあろう。私が滞在していた95年8月ボスニア・ヘルツェゴヴィナの紛争が燃え盛っていた。8月4日クロアチアが突如クラジナの奪還をはかってセルビア勢力に攻撃をしかけ、全面的戦争の危機に陥った。翌日、ウィーンの大衆紙Kurierに次のような言葉が見えた。「たとえ、歴史は単純に繰り返さないとしても、我々は常にバルカンがかって一度全世界を火の中に投げ込んだことを忘れるべきではない。」

1914年サラエボで、皇太子夫妻がセルヴィア人青年に暗殺され、第一次世界大戦の引きがねになったのであり、バルカンの火種の怖ろしさはオーストリア人には身に沁みている筈である。

（1999年3月28日、記）



英国に15年も住んでいた一日本人記者によれば、英国のレストランの料理が最近格段においしくなったという（黒岩徹「プレミアのイギリスはおいしいぞ」『諸君！』1999年2月号）。英国人は自分達の食べ物を世界でも不味いものの代表と自認してきたフシがあり、私も初めての梅外滞在経験をした1970年夏に、同じ程度の中華料理をハーグ、パリ、ロンドンと食べ比べてみて、ロンドンのが一番不味かったという印象がある。

しかし、住めば都で、その3年後にロンドンの南郊に2年間住んだときは、食べ物の不味さは気にならないで過ごした。月曜から金曜までの昼食は大学の食堂で普通の英国料理を食べていた。我が家の子供達も近所の小学校で給食を食べ、今日はデザートが だったよ、などといって大いに楽しんだようだった（このために毎週月曜日に1週間分のディナー・マネーを学校に持参した）。魚好きの私は、大学食堂でも鯀のムニエールが出る木曜日（これはロンドン・スクール・オブ・エコノミックス）と、直径6・7センチで厚さ1センチほどの円盤の鱈子（缶詰か）の醤油煮ともいうべき料理の出る金曜日（これは私の所属したキングズ・コレッジの食堂が金曜日に肉を避けたため）がとくに楽しみだった。瀬戸内生まれの私には、鯀の美味さは生まれて初めての発見であったかもしれない。これに味をしめて近くの朝市で生の鯀を見つけ、自宅で塩焼きを作ったこともある。ほかに、鱈が主な材料だが、フィッシュ・アンド・チップスがある。これは、あるいは上流階級の人達には敬遠されるものかもしれないが、私

は美味しいと思う。我が家のあった村に一軒のフィッシュ・アンド・チップスの店があり、何度かの週末に、歩いて5, 6分のその店に出向き、待っている間に揚げてくれる鱈又はプレイス (plaice = オレンジの斑点のあるカレイかヒラメ) とチップス (ジャガイモのぶつ切り一皮をむかず、ときに土がこびり付いている一から揚げ) を急いで持ち帰り、夕食として楽しんだ。

フィッシュ・アンド・チップスには今でも愛着があり、英国を訪ねるたびに必ず食べている。愛知大学がロンドン西方のレディング大学に送る英語研修生にこれまで3回付き添ったが、3回ともレディング滞在中は毎日パブでビールを楽しみ、往々にしてそのままパブでフィッシュ・アンド・チップスを夕食とすることになった。よく飽きないもんだね、といわれるが、私は全く飽きることがない。

四半世紀前の滞英中、ピカデリーのフォートナム・アンド・メースンという高給食料品店の最上階のレストランで知人夫妻に素晴らしいフランス料理をご馳走になったし、後年チェルシーの小さなレストランでキングズ・コレッジ時代の恩師からこれも素晴らしいキドニー料理をご馳走になったり、また別の年に同じ地区の彼のクラブで美味しいフランス料理をご馳走になったこともある。ほかにも、同僚のM氏のご母堂がご健在のときにその地元チジックのテムズ河畔のレストランでムール貝の料理をご馳走になったり、私の開拓したピカデリー・サーカス裏のシーフード・レストランでドーバー・ソールのバター焼きに舌鼓を打ったという経験もある。どれも印象深い経験だが、これらはいわばよそ行きの料理だ。回数が少ないから覚えているのかもしれない。

料理の美味さでは、1973年秋、家族が合流するまでの2か月世話になったロンドン北部の下宿のおばあちゃんの手料理を忘れる訳にはいかない。女学生時代にベルギーに留学していたといい、その時に味にうるさいベルギー風を身に付けたい。ブリティッシュ・カウンシルの紹介でそのおばあちゃんの所に下宿し、最初の約束では賄いは

朝食だけになっていたところを、頼み込んで夕食も作ってもらうことにした。この夕食が素晴らしかった。朝食も美味しく、私の好みは、ベーコン・マッシュルームだった。亡くなったハズバンドもこれが大好きでしてね、殿方は皆さんこれが好きなんでしょうかね、というのが口癖だった。アガサ・クリスチーに似た上品な老婦人で、日本人びいきだった。

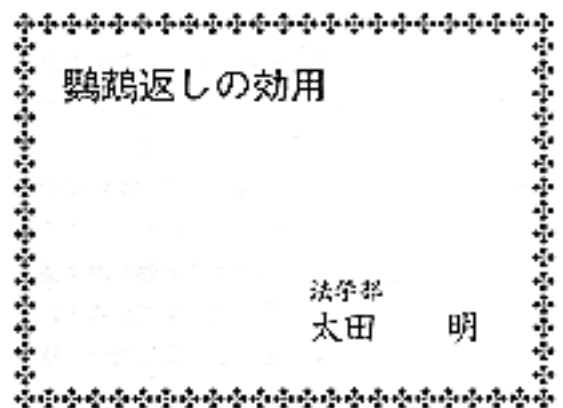
こういう具合に、確かに美味しいものはあるのだが、ひとつは英国人のユーモアか、自らの料理を不味いものと笑い飛ばす風があるのも確かだ。ここにとっておきのエピソードがある。1975年7月中旬か下旬のこと、タイムズ紙で読んだ話である (当時の新聞切抜を紛失し、記憶に頼っている)。当時首相の地位にあったハロルド・ウィルソン氏がたしかパリから帰国し、下院議会で帰国報告をしたのが、詳細に報道されていた。ウィルソン首相は、報告の冒頭で、パリ滞在中に腹をこわしたが、これは多分フランス料理が美味すぎて食中りをしたのであろう、と議場を笑わせ、ついで、帰宅して英国の質素な (plain) 食事に戻ったら、たちまち腹の具合がよくなったと満場を沸かせたのである。

その時私は不覚にもウィルソン首相の渡仏の用件に十分注意を払っていなかったが、帰国した後、1977年6月30日付けの英仏大陸棚境界画定仲裁判決をその翌年に読んで、ちょうどウィルソン首相がパリ訪問中の1975年7月10日に英仏間の大陸棚の境界画定を仲裁裁判に付託する協定が署名されていたことを知り、当時の不明を恥じたのである。後年世界中の大陸棚の境界画定判例を研究することになるこの私が、こともあろうに、当時ウィルソン首相がおそらくその英仏仲裁付託協定の交渉のために渡仏していたことを見逃していたのだ。ウィルソン氏のユーモアにごまかされて、彼の冒頭の冗談の後の重要な報告を私が見落としのか、それとも、このような重要な事案はわざと報告から省いてあったのか (この仲裁裁判は両国にとって機微な案件で、判決文の公表も意図的に1か月ほど遅らされたし、判決文以外の裁判関

係の文書は一切公開しないことが約束されている。拙稿「英仏海峡大陸棚境界画定仲裁裁判について」『愛知大学・法経論集・法律篇』87号参照）、ともかく彼のユーモアに感嘆した記憶がある。

当時ロンドン近郊に住む口さがない日本人連の間では、英国人の家庭に食事に招かれたら、一通り腹ごしらえして行った方がよい、といわれていた。日本人家庭では人を食事に呼ぶときは、遇刺ともいえるほどに料理を用意するが、私の経験では、英国人の家庭に招かれたときは、まず、長々とドリンクの時間があり、そこでの話題は森羅万象にわたる。この間は僅かなつまみしか出ない。いいかげんお腹が空いたとおぼしき頃になってやっと、食卓のある別室に案内される。さて食事だ、と身構えると、出されてくるのはあまり大きくない肉の塊の焼いたものと少しばかりの温野菜でおしまい。その後はデザートで、これには招待した側が意匠を凝らす。

要するに、人を食事に呼んだときは、長々とドリンクを楽しみ、料理はあまり要らないという印象だ。その代わり、酒はふんだんに用意しておく必要がある（私の住んだ家は家具付きだったが、グラスの種類の多さに驚いた）。彼らは、私の印象では、招かれたときには、とことん飲む。そして、夜半前に暇乞いをするのは失礼だと心得ているフシがある。これは一つの食文化であって、私の郷里などで、客が食べきれないほどに食べ物でもてなし、話の内容よりは客がそこに居ることを重んずるといった風の接待とはまるで違う文化だ。食べ物はサシミのつま、メインは話で、その会話の中心は招待した側の主婦が務める。それを盛り上げるのは酒というわけである。だから、酒に飲まれて話ができないようでは信頼を失う。そういう文化のようだ。そのために、食べ物には我々日本人ほどこだわらないということなのかどうか。今後の研究課題だ。



外国語の運用に関して日本人は読んで理解したり、読んで翻訳したりすることは得意だが、聞いて話すというコミュニケーション的運用の面では劣るというのが一般的な評価である。それはいったいなぜなのか。この点に関連して、今回の海外研修中に経験したことを少し記してみたい。

私自身は外国語の学習者という観点からは、すでに古い世代に属する。つまり、会話を中心にしたコミュニケーション的運用能力ではなく、文字で書かれたものを読んで理解することを中心にしたドイツ語教育を受けた経験しかない。

すでに20年以上前になるが、私の私の大学の教養課程では、第二外国語としてのドイツ語の授業は文法と講読の二本立てであった。文法は週に2コマ、そのなかで例の定冠詞の変化から始まり、接続法を除く基本的な部分に関しては1年前期でほぼ終了した。講読も週に2コマだったが、違う担当者が別の読本を教科書としていた。私は理科系の学生であったが、この点では理科文科を問わなかった。いまからみれば、いや当時でもかなりハードなスケジュールである。学術の言葉としてのドイツ語の地位は、私が専攻しようと思っていた分野ですでにかなり低下しており、英語で十分であったから、本腰を入れてドイツ語を学ぼうという動機は弱かった。もっとも、マーラーの歌曲をドイツ語で理解し歌いたいという実に殊勝な同級生もいたのだが。私の方は、大学の入学関連書類に第二外国語選択の欄があったので、「まあ外国語はドイツ語だな」という父の友人の言葉のままにドイツ語を選択したに過ぎない。（その父

の友人からは、当時の代表的な独日辞典通称「木村・相良」一を入学祝いに贈られた。表紙も取れバラバラになりそうだが、いまでも時々やっかいになっている）。

しかし、文科系に専攻を変えて、大学院での研究テーマにドイツ文化圏のことを扱わざるをえなくなると、どうしてもドイツ語を勉強し直す必要に迫られた。この時はさすがに一年間、本当に必死になった。修士論文で主に取り上げたい人物に関しては短いものが2編ほど翻訳があるだけだったので、その主著（300頁ほど）をとにかく独力で、辞書と文法書を首っ引きで、日本語にしてみろという作業に毎日5時間ほぼ1年間、専念した。最初は遅々として進まない作業に苛立ち、半ば諦めかけたが、是非とも必要な部分は曲りなりにも訳し終えた。さすがに自分の将来がここに懸っているという切迫感ゆえか、これほど懸命に外国語を勉強したことはあとにも先にもない。専門知識においても語学上の知識においても全くの素人に近いものがほとんど初めから訳したものだから、そのままではとても公にできるものではない。しかし、現在の私が多少ともドイツ語が理解できるとしたら、それはこの作業の賜物である。同時にこの作業を通して、文法や構文を復習的に理解するだけではなく、外国を読んで理解し、さらに日本語に訳すことの困難さを身をもって体験したのである。

ドイツの研修に出発するまで教師にドイツ語を教わったのは後にも先にも大学の教養課程での2年間だけであり、ドイツ語をある意味では本気で勉強したのは修士課程の2年間に過ぎない。つまり、会話に至っては皆無なのである。テレビ、ラジオのドイツ講座やテープで耳ならし程度のことはしてみたが、語学学校に通ったり、教師についてレッスンしたりというような機会はついぞない。くおおいおいそれで大丈夫かい>という言葉がどこかから聞こえてきそうである。

ドイツでの困難はまず聞き取りにあらわれた。個々の単語ではなく、話のリズムが全くといっていいほど聞き取れないのである。前提的な知識が

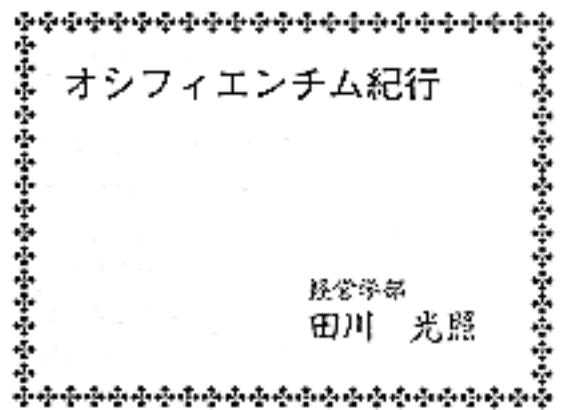
皆無ではないから、断片的にでも単語が聞き取れれば、相手がいわんすることは推測できないことはない。しかし、全体としての繋がりが聞き取れない。放送やテープでは聞き取りやすいように発音やリズムをきれいに整えてあるが、ドイツ語を日常語とするが人々が常にそうしたきれいで整った言い方や発音で話してくれるわけではない。また、文草語から入ったせいで、話すにも聞き取るにも、まず主語述語関係をしっかりしようとしがちである。しかし、これではスピードについて行けない。

ベルリンで私も生まれてはじめて語学学校（Goethe Institut）に通った。同じ時期のクラスメートには若い学生さんだけではなく、通信社記者や放送局デスクあるいは心臓外科医も混じっており、授業の終了後、彼らと昼食をともにすることがあった。大学時代には、ドイツ語とは限らないが、第二外国語を学んだことがある人たちが、一様に、自分はクラスの落ちこぼれだと嘆くこと頻りであった。その挙げ句、日本の学校の先生たちを全く知らない外国語学校に放り込めば、落ちこぼれの気持を理解できるようになるのではというあらぬ方向に話が向ったこともある。こんな八つ当たり気味の話が出るのも、いかに語学の習得に苦労しているかを物語っている。私だけではなく、皆が、もっとも苦労していたのはやはり聞き取りである。話すほうも当然うまくはできないが、相手はたいいネイティブであるから、いちおう何とか単語を並べておけば、こちらの言いたいことを推測して対応してくれる。ここまでは他力本願である。しかし、相手が応えてくれたことが聞き取れないのでは話にならない。（たいい「旅行会話ハンドブック」が実際にはたいい役立たないのはこのせいである。）

どうして聞き取りが苦手なのだろうか。日本の外国語教育が悪いせいだと言ってしまうと、ことは簡単である。根本的には、音を聴いて覚えるという訓練の不足が大きいのではないかと。とりわけ、私のように読んで意味を理解することから外国語を習得した場合、確かに相手の言わんとする

ことは推測できるが、鶏鳴返しのように、相手の言ったことを繰り返すことは難しい。これは母語ででも難しいが、決して不可能ではないだろう。鶏鳴返しができるということは、言葉の意味はともかく、聴音での弁別と発音での弁別ができるということだろう。われわれが外国語を学習する場合には、たいてい、まず文字を見て意味を理解することから初め、その後に音を当てはめてゆく。母語としての日本語の場合には、当然、それとは逆のことを生まれてこのかた数えきれないほど繰り返しているはずなのである。完全ではないにしても、聴いたことを音に出しての繰り返しができるようになるかどうか、聞き取りができていくかどうかの境目にあるのではないだろうか。そしてこれが話すことへの捷径でもあることも明らかであろう。（この点は、日本に留学し日本で学位をとったドイツ人の日本研究者も同意してくれた。）

ただ、読んで理解することの重要性がこれによって否定されるわけではない。外国語を学ぶ際には時間的な制約性があるはずだから、今日においても、意味理解を中心にした学習のほうが効率がよいことは確かだろう。問題はそこに、耳から入って口から出る練習方法をうまく加えて行くことではないか。私の場合で言えば、若い時の集中の際、5時間のうち1時間程度を音読に充てておけば、今回のような苦労は軽減されたということだろうか。



ワルシャワから列車で約2時間半南下するとポーランドの古都クラクフに着く。ポーランドは第2次大戦でほとんど全土が破壊されたが、クラクフは幸い戦災を免れ、中央市場広場を中心とした中世以来の瀟洒な町並みを今にとどめている。私たち共同研究グループ4名は1999年8月19日、そのクラクフ発午前8時30分のオシフィエンチム行きバスに乗り込んだ。バスは、路上駐車車の車に妨げられて立ち往生するというハプニングもあったが、途中のバス停で客を乗り降りさせつつ、ほぼ予定時刻の10時にオシフィエンチム博物館前に着いた。オシフィエンチム博物館とはアウシュビッツ強制収容所跡にほかならない。

インフォメーションセンターの前で待ち合わせた博物館でただ一人の日本人ガイド中谷剛さんに案内されて、私たちは収容所正門をくぐった。上にはARBEIT MACHT FREI（働けば自由になる）というプレートがかかげられている。1940年にナチス・ドイツがここに収容所を建設してからほぼ5年間、ポーランド人のほかユダヤ人はじめ



ソ連軍捕虜など全ヨーロッパから送り込まれた囚人たちが、毎日労働に出かけては帰還する際にくぐった門である。

中には30棟におよぶ建物が整然と建ち並んでいる。すべて煉瓦造りの2階建てで、それら建物の一部は、内部を改装して資料展示室として利用されている。偽証明書の数々は、ユダヤ人たちを連行する際、移住に過ぎないと思わせるために発行されたものである。囚人が連行されてくる際に持ってきた名前入りのポストンバック、眼鏡、身障者から奪った義手や義足、布地に織り込むために囚人から刈り取られ、すっかり変色した頭髮など、それぞれ数トンに及ぶ山がガラス越しに展示されている。「死のブロック」と呼ばれる11号棟には立ち牢が当時のまま保存されている。これは、1メートル四方ほどの密閉された小部屋に数人の囚人を立ったまま閉じこめておくためのもので、照明も通風口もない。この「死のブロック」と隣の10号棟に挟まれた中庭に面する窓はすべて木の板で覆われている。これは、中庭で執行される処刑を窓から見えなくするための目隠しである。銃殺には消音銃が用いられた。

私たちは、バスで10分ほどのプジェジнка（ドイツ名ビルケナウ、第2アウシュビッツ）に向かった。まず正門の階上にある展望室に案内され、収容所全体を見渡した。オシフィエンチムに比べその広大さに圧倒される。なにしろ、総面積約175ヘクタール（約53万坪）の敷地になんと300棟以上のバラックが建ち並んでいたという所である。バラックは煉瓦造りのものと木造のものとがあったが、現在では煉瓦造りの45棟と、木造の22棟を除いて崩壊し、崩壊後にも残った煉瓦でできた煙突が林立している。すべてが整然と、静寂の中に眠っている。しかし、ここで百数十万人といわれる人々が命を失っていったのは、紛れもない歴史的事実なのだ。そば降る小雨が、沼地に作られたというこの収容所の特に冬季における厳しさを思わせた。

正門からまっすぐ鉄道の引き込み線が延びている。ここへの囚人の輸送には、当初はオシフィエンチムの貨物駅からトラックが使われていたが、

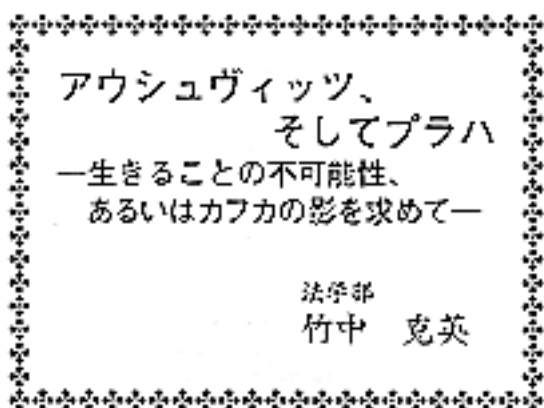
連行されるユダヤ人の増加にともないそれでは間に合わなくなり、この引き込み線が敷かれたのであった。私たちは正門を背に、2本の引き込み線の間に作られたプラットホームを歩いた。プラットホームと言っても、単なる砂地にすぎない。このプラットホームに降りると、囚人たちはただちに2つのグループに選別された。労働に耐える者とそうでない者のグループである。労働に耐えないと見なされた人々はガス室に直行させられた。

プラットホームのはずれの先には瓦礫の山が残っている。これは、ドイツ軍が撤収する際に破壊したガス室の残骸である。ここに連れてこられた囚人たちは、旅の疲れをとるためにシャワーを浴びなさいという嘘に欺かれて死地に赴いたのであった。

あまりにも重い歴史的事実の証言であるこの収容所跡についての軽々しい感想は差し控えさせていただきたい。それにしても、オシフィエンチム博物館の維持・運営の資金にドイツ政府およびドイツ企業から多額の援助金が提供されており、このことを知っている一般のポーランド人のドイツに対する信頼が回復されているという中谷さんの話を聞くにつけ、思い出されるのが日本の戦後処理のまずさである。たとえば、残酷な人体実験を行い多数の人命を奪ったことで知られる731部隊ひとつとってみても、日本政府は謝罪どころかなんら明確な態度表明をしていないのである。

私たちはいくつかのバラックを覗いた後、オシフィエンチムに戻り、午後1時20分発のクラクフ行きバスで収容所跡をあとにした。





アウシュビッツ絶滅収容所

1999年8月19日、青空に輝いていた太陽が急に雲にかき消され、にわか雨が襲ってきた。わたしは有刺鉄線で仕切られた広大な敷地のちょうど中央に立っていた。両足は不安定に砂利の中に沈んでいる。アウシュヴィッツ（ビルケナウ）絶滅収容所。それがいま立っているこの場所のかつての呼び名だった。木造の高い監視塔の下を抜けて、引込み線の赤錆色した鉄路が、この収容所の広大な敷地を横断している。いまわたしが立っているのは、かつてほとんど日常化された死を強いられた無数の人々が最後に辿り着いた場所だった。わたしは、それらの人々がこの場所で死を虚しく引き延ばし生きなければならなかった絶望的な時間を思いやり、まるで無数に放たれた矢がひとつの的に向かうように、彼らの一つ一つの死に人類の歴史的時間が収斂していく様を思い浮かべていた。それは何か具体的なイメージとしてではなく、感情的イメージとでもいうべきものとしてしか捉えようもない像だった。

人間性を剥奪された死、日常化された悲惨、死ぬためにさえ尚生きることを強いられた生、そういった無数の、それら一つ一つにもっと注意深い目を注ぐならば、どれもがそのような空しい言葉では到底捉え切れないほど互いに異なっていたはずの人々の運命が終局したこの場所は、わたしたちが（いや、その時わたしはもっと大げさな表現の仕方をしないではいられない絶望感に襲われていた）、人類が、その歴史的過程でついに辿り着いた地点であるのだ。わたしには、この広大な無

の空間が、人類の歴史的宇宙の巨大なブラックホールのように、すべてを漆黒の闇に飲みこむ、不気味な様相をした「人類史の絶対的零地点」のように感じられた。我々人間は、ただひたすらこの虚無の空間に向かって、長い歴史的道程を歩んできたのではないだろうか。

ポーランド、クラクフ近郊のビルケナウを離れ、その後の10日ほどをワルシャワ、ベルリン、ドレスデン、プラハで過ごした。かつての共産主義のユートピアの悲惨から脱出して、忌まわしい過去を消し去ろうとするかのように、急速に変貌しつつあるこれらの町を見て回る時にも、あの絶滅収容所で感じた絶望的な悲哀が襲ってくる。その悲哀は、例えばヒトラーナチズムの圧制に対する、あるいは東欧社会主義の暴力的な社会機構に対する怒りといったものさえ飲みこんでしまっう、空漠としたものだった。

プラハ、カフカの影を求めて

道に迷いながら、火薬塔（Pulver Turm）から15分かかって探し求めていたカフェ・アルコ（Café Arco）にたどり着く。建物はさびれ、店はすでに廃店となってから久しい。ただ埃にまみれたガラスに色褪せた店の名前だけが、かつての名残をとどめている。

プラハは寂しい街だ。多くの観光客が溢れているにもかかわらず、その表面の活気の背後から、今世紀初頭の古い街の姿が、あるいは、10年前まで社会主義の圧制の下で深く沈黙を守り、ひたすら生きること、そのことに意味を見出そうとしていたプラハの姿が浮かび上がってくる。これはもちろんわたし自身がこの街に対して抱いている古くからの印象にすぎない。カフカが生まれ、41年の生涯を静かに生き、ただ内面にのみ生きることの意味を求め、生きることへの熱情を書くことに求めた街プラハ。わたしの中では、この街はカフカの世界と同じように、孤独と静寂の中に沈んでいなければならない。

物言わぬ街だけが、その遙か歴史の彼方から沈黙の深い意味を慎ましやかに語りかけてくる。通

りすぎる幾多の異国の観光客のように、歩き回るのはやめよう。ただひとり、街角のベンチに腰を下ろして、この街の辛い歴史的時間を通して聞こえてくる微かな息づかいを聞き取ることに、全身の神経を集中すればよい。目で見るのは止めよう。聞き取ることこそが大事なのだ。耳で、いや、耳ではなく肌で..... “そして、何よりも心で聞き取ることが。街のかすかな鼓動が、カフカがこの街の中でひとり生きた時代の人々の鼓動が聞こえてくる。



埃にまみれたカフェ・アルコの窓ガラスの奥に、わたしは80年、90年前にカフカがあのだう細った身体を椅子に沈めて、静かに、この街で生きることの意味を求めて、深い思いに耽っていたであろう、その姿を感じ取っていた。生きることの不可能性の証明、カフカは断篇『ある戦いの記録』の一節にこの表題を付した。生きるとは、当時のカフカにとって何を意味していたのか。歴史の時間は時には静謐なヴルダヴァ河のように、時には荒々しい怒涛のように、流れ来り、そして流れ去る。生きること、もしこのような時の流れの刹那さの中にあっても、なお変わらぬ意味があるとすれば、それは自分が「ある」ことを通して、「何ものか」に、「変わらぬ何ものか」につながっているということであるにちがいない。カフカはこの「変わらぬ何ものか」を言葉によって掴み取ろうとした。しかし.....そのものを掴み取ろうとすればするほど、それが言葉では掴み得ないものであることを、彼はますますはっきりと知ることになる。

(1999年8月27日プラハ、ヴァツラフ広場に
て)



〈編集後記〉

2000年という大きな節目の年での第二回発行となりました。第一回に引き続き EU 諸国を特集しました。今、まさに大きく変化しつつある EU の国々の状況が生き生きと伝わって来たのではないででしょうか。投稿をいただいた先生方にお礼申し上げます。次回はアジアの国々を特集します。ふるってご投稿下さい。

(編者一同)



(今回のカットはフランス語担当の河原誠三郎先生が担当してくださいました。)